

瓢 鮎 抄 (二〇九)

尾池和夫

鏡餅より上座なり菊花石  
初めての神社探して初詣  
間違へず配り終へたりお年玉  
竹とんぼ上手く仕上がり二日かな  
初買のまづお揚げさんお葱さん  
書初や骨といふ字を歩かせて  
お銚子を下戸に気兼ねの三日かな  
冬空へ供物をさらふ烏ゐるて

今年こそとわざわざ声にして四日  
鯨見の一日の果て温め酒  
青空を見上げてゐたりはや五日  
小道具の竜の頭や初芝居  
羽子板や曾我の五郎のむきみ隈  
屠蘇気分まだまだまだといふ六日  
すき焼や客の流儀を聞きもして  
ずつしりと大地踏みしめ寒立馬  
大地震目覚めむとする枯野なり  
冬雲の切れて太陽スペクトル